

世界の現状を知り、自分たちにできることを考えよう

～ 互いの違いを認め、尊重し合うとともに、よりよい人間関係を築こうとする生徒の育成～

三重県鈴鹿市立創徳中学校 研究代表者 大藪 延子先生
TEL 059-382-5205 FAX 059-382-5720

1. 研究のねらい

- (1) 多様な価値観を持った人が互いに支え合いながら、ともに未来を築いていくために、コミュニケーションスキルを磨くことが重要であることを学ぶ。
- (2) 開発途上国の現状についての調べ学習を通して、世界の貧困と自分たちの生活は無関係でないことに気づき、主体的に課題に向きあう気持ちと態度を養う。
- (3) ユニセフの活動内容を知り、自分のことだけでなく、他者、地域、世界にも関心を向け、自分にできることを考え、発信する態度を養う。

2. 活動計画

(16時間) 及び使用教材

- | | | | | |
|-----|---------------------|-------|-----|---------------------------------------|
| 1学期 | 「コミュニケーション」 | …………… | 4時間 | (全学年) |
| 2学期 | 「統計データから世界の現状を調べよう」 | …………… | 4時間 | 「UNICEF世界子供白書」
「ユニセフと世界のともだち」(全学年) |
| | 「世界の子どもたちの現状を知ろう」 | …………… | 2時間 | ユニセフ出前講座(講師)(3年生) |
| 3学期 | ユニセフビデオ学習 | …………… | 2時間 | (2・3年生) |
| | 「伝えよう、私からのメッセージ」 | …………… | 4時間 | (3年生) |

3. 実践

本校には、日本語を母語としない外国人生徒が多数在籍する。子どもたちは、小学校時代から多文化共生教育に関わる学習を進めてきているが、まだまだ互いの文化や言葉の違いにとまどいを感じ、別々のグループで行動したりすることが多い現状である。

本校では、国際理解教育を人権教育の重要な柱として位置づけている。気持ちを十分に言葉で表現できないために起こるトラブルなどが少なくない状況から、まず「コミュニケーション」に関する学習から始めた。コミュニケーションスキルを磨くことが相互理解を深め、よりよい人間関係を築くと考えたからである。

【1学期】

まず、コミュニケーションの手段について考えた。言葉を使わないコミュニケーションが多いことに気づいた。そして、実際の活動を通して、相互理解をするためにはコミュニケーションが必要であることを確認した。日常生活の中で自分たちが使っている言葉をふり返り、「自分が言われたら、とてもうれしくなる」言葉と、「悲しくなる」言葉について考えた。さらに、互いに理解し合い、信頼し合える人間関係を築くためにはどんな話し方や聴き方が大切なのか、ということについてクラス全員で考えた。

コミュニケーションのまとめとして、話し手と聴き手の両方に大切なことは、「相手を見て」「相手の気持ちを考えて」「最後まで」聴き、話すことであると生徒たちは考え、これらのことを掲示物にして各教室に掲示した。

【2学期】

2学期は、世界の現状を知る活動から入った。

「UNICEF世界子供白書2007」にある様々な統計データから、「平均余命」「5歳未満死亡率」「低体重児

中・重度」「改善された水」「初等教育就学率 男」「初等教育就学率 女」の6つを取り上げた。

テーマの異なるそれぞれのグループで大きな白地図を広げ、協力し合って世界の現状を色分けしたあと、その地図を見て感じたことや疑問点などをまとめて発表した。

その後、資料「ユニセフと世界のともだち」を通して、学習を深めた。



「ユニセフ資料を基に色分け作業」



「発表する生徒(2年生)」

<生徒の感想より>

学校に行けない人達、きれいな水を飲めない人達がいっぱいいることを知り、自分の今の状態がどれだけ裕福なのだろうと思いました。1日に何人もの人達が死んでいく中で、自分が今ここで生きていられるということは、すごいことだと思いました。私は、大人になったらその人達を助けたい、そう思いました。(1年生)

どの項目でも色分けはだいたい同じで、先進国は青色が多く、アフリカなど開発途上国は赤色が多かった。このことから、すべてが関連しているように感じた。たとえば、安全な水がないから長く生きることができないなど、一つの問題が、またもう一つの問題を生んでいるような気がした。(3年生)

また、3年生には、ユニセフ出前講師の杉谷哲也氏に来ていただき、「世界の子どもたちの現状」について授業をうけた。各クラスの雰囲気に合わせて、生徒たちの心をしっかりと掴んで話を進めていただいた。生徒たちは、杉谷先生の巧みな話術と心に響く体験談に、大きく感動したようであった。

【3学期】

3学期は、ビデオ「ユニセフと地球のともだち」「この世界に生きる子どもたち」を通して、ユニセフの活動について学習した。そして、自分たちはどのようなことを心がけていくべきか、ということについて考えた。生徒たちにとって、世界の子どもたちの様子がとても印象に残り、ユニセフの活動についてもより身近に感じる事ができたようである。

<生徒の感想より>

- ・今まであまり募金はしていなかったけれど、積極的に募金していきたいと思います。面倒くささらず、できる事は行動していきたいと思えるようになりました。外国のニュースに、これからは目を向けていきたいです。(2年生)
- ・日本も昔はユニセフに支援してもらっていたのだから、今は辛い思いをしている子どもたちに何かできることをしていかなければならないと思う。発展している国々は、開発途上国を支えていく必要があると思う。私たち一人ひとりがお金を出して、きれいな水が出る井戸を作って、少しでも辛い思いをしている子どもたちを減らさないといけないと思う。(2年生)
- ・ユニセフというのはすごいと思った。難民の人たちを助けるという、すばらしい活動があることを知り、とても興味を持ちました。(3年生)
- ・食べ物は残さずに食べ、必要でないものを買わずに募金したいと思います。また、エイズでは、偏見を持たないように皆に伝えることができると思います。(3年生)

さらに3年生には、これまでの学習内容から伝えたいメッセージを書き、それについての思いを話す「発信」の場を設定した。まず、各クラスで、全員が一人ずつ発表した後、クラスで5名の代表者を選び、体育館で学年全体にアピールした。仲間の発表に全員が真剣に聞き入った。

「世界のおとなたちへ」

私は、これまで3年間にわたって、人権について学習してきました。その中でも特に私の心の中に残っているのは、世界の子どもたちの現状についての授業です。前から、テレビのニュースや社会の授業などを通して、世界の国の中には、十分な医療設備が整っていない国、食べ物が不足している国、いまだに戦争や地域紛争を続けている国などが多くあることは知っていました。もちろん、世界の状況やそのような国々の被害については、自分なりに理解しているつもりでした。

しかし、この授業を受けてから、私の、世界の国々に対しての視点が大きく変化したのです。

この授業の内容の多くは、世界の子どもたちについてでした。ユニセフで活動している方のお話を聞いたり、プリント学習をしたりと、様々な学習を行いました。なかでも、一番衝撃的だったことは、世界の子どもたちの現状についてのビデオを見たことです。そのビデオに収められていたのは、様々な子どもたちの姿でした。学校に通えず家族のために働いている子、栄養失調で今にも息絶えてしまいそうな子、兵士として訓練され戦場に送り出される子、戦争で親や兄弟を亡くした子など、私の目に映ったのは、あまりにも厳しい現実の中で、必死に生きている子どもたちでした。

世界の子どもたちの生活は、私が想像していたものよりはるかに苦しいものでした。そして、戦争や飢餓による一番の被害者は子どもたちだと、私はその時気づいたのです。

そのときから、私は世界の子どもたちの思いについて考えるようになりました。世界の子どもたちは、そのような状況におかれて何を思っているのか、世界の子どもたちが一番望んでいることはどんなことなのか、などビデオから感じとれることを想像してみたのです。そして、あることに気づいたのです。

それはどの子どもも、何らかの形で大人を必要としている、ということです。学校で勉強ができるのも、安全な水が飲めるのも、すべて大人がいるからこそ成り立っているものだと思います。それに、子どもたちを守り、育てる義務を、どの大人も持っているはずです。子どもたちは、大人たちと共に生きることを、何よりも望んでいるはずです。そして、何よりも子どもたちを苦しめている原因を作り出したのは、大人たちのはずです。大人たちには、子どもたちをこのような状況から救い出す使命があります。子どもたちを労働力や戦力に変えるなんて、もってのほかです。世界中の大人たちがもっと子どもたちのことを考えていくべきです。そして、もっともっと多くの大人たちが子どもと正面から向きあってほしいです。(3年生)



4. 成果と課題

【成果】

- ・日ごろ自分たちが当たり前だと思っている生活（いつでも安全な水が飲め、十分な食べ物があり、学校に行けるなど）が、世界では当たり前でないことを知り、自分たちの生活が恵まれていることに気づくことができた。
- ・日本もかつてはユニセフの援助があって、現在の豊かさがあることを知り、世界が協力し合うことの大切さに気づき、何かしなければならぬ、という思いを持つようになった。
- ・出会い学習や体験学習を通して、世界の子どもたちの様子を直接生徒たちの心に刻み込むことができた。これらの現状は自分たちの生活と無縁ではないことに気づき、より積極的な姿勢で国際協力について考えることができるようになった。

【課題】

今後は、各学年の達成目標を明確に掲げた系統だった指導計画が必要である。そして、各学年に「発信」の機会を位置づけ、3年次には保護者や地域の人など様々な立場の人たちに自分たちの意見が発表でき、行動にうつせるように進めていきたい。